

<研究ノート>

## Quizás と「たぶん」 *Quizás and tabun*

川上 茂信  
Shigenobu Kawakami

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies

### 要旨:

スペイン語のモダリティ副詞 *quizá(s)* はしばしば「たぶん」と訳され、多くの学習者向け文法書には *quizá(s)* を含む「疑いの副詞」の説明に「たぶん」が用いられている。しかし、筆者の印象では「たぶん」は *quizá(s)* よりも高い蓋然性を示し、適切な訳語ではない。学生に説得力のある説明をするため、スペイン語話者が *quizá(s)* を含む文に感じる蓋然性のデータと日本語話者が「たぶん」に感じる蓋然性のデータを集めるインフォーマルなアンケート調査を行った。その結果、筆者の印象が裏付けられ、「たぶん」は *quizá(s)* の訳語として相応しくないことが確認された。また、アンケート結果から、スペイン語の「疑いの副詞」の研究のための示唆がいくつか得られた。

### Abstract:

The Spanish modal adverb *quizá(s)* is often translated to *tabun* in Japanese, and many grammars for learners of Spanish use *tabun* when introducing “adverbs of doubt”, which invariably include *quizá(s)*. However, our impression is that *tabun* expresses too high a degree of probability to properly translate *quizá(s)*. To dissuade our students from using *tabun*, we conducted two informal questionnaire surveys, aimed at gathering data on impressions that Spanish and Japanese speakers get of the probabilities shown in sentences containing *quizá(s)* and *tabun*, respectively in their own language. The comparison of the results confirms our supposition and shows that *tabun* is not a right word to translate *quizá(s)*. The results also give suggestions for further studies of Spanish “adverbs of doubt”.

キーワード: モダリティ副詞、叙法、スペイン語、日本語

**Keywords:** modal adverbs, mood, Spanish, Japanese

### 1. はじめに

スペイン語の *quizá(s)*<sup>1</sup> は、伝統的に「疑いの副詞」と呼ばれるグループに分類され、西和辞典では「たぶん」という訳語が当てられている。しかし、日本語母語話者であるスペイン語学習者としての私の語感では、「たぶん」は *quizá(s)* よりも「疑惑度」が低く、訳語として相応しくない。授業で学生が *quizá(s)* を「たぶん」と訳したら、「たぶん」は(確信度が)強すぎると思う、と説明している。しかし、これは個人的印象の域を出るものではなく、辞書を疑うことを知らない学習者も多いので、今までのところ効果的な指導はできていない。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

<sup>1</sup> この語には *quizás* と *quizá* という異形態がある。本項では *quizá(s)* を使うことにする。

しかし、これでは少なくともスペイン語教育の観点から望ましくないと考え、学生たちを説得するためにインフォーマルなアンケートを実施した。内容は、スペイン語教育に携わるスペイン人を対象とした、スペイン語についてのものと、スペイン語を学習する日本語話者を対象とした、日本語についてのものからなる。記述的に十分な根拠をもって *quizá(s)* と「たぶん」を対照するためには、両者が持つモダリティ的価値をきちんと分析する必要があるが、今回のアンケートはそれを目指したものではない。しかし、当初の目的を達成できる結果が得られただけでなく、*quizá(s)* を含むスペイン語の「疑いの副詞」について議論を深めうる論点が見つかったので、研究ノートとして報告することにした。

スペイン語の「疑いの副詞」の多くは、動詞の叙法として直説法とも接続法とも共起する。そして、接続法との組み合わせでは疑いの度合いが増すと説明されることが多い。しかし、従来の学習文法の記述は、この叙法の交替に目を奪われて、それぞれの副詞の働きに十分注意を払って来なかったように思われる。

以下、第2節では日本語でなされてきた *quizá(s)* の記述をいくつか紹介し、第3節で2つのアンケートの結果を報告する。最後に第4節でアンケート結果が示唆する論点を挙げることにする。

## 2. 日本における *quizá(s)* の扱い

### 2.1. 学習辞典

東京外国語大学でスペイン語を専攻する学生が多く使っている辞典は、白水社の『現代スペイン語辞典』（宮城 & 山田 1999）と小学館の『西和中辞典』（高垣 2007）である。

まず宮城 & 山田 (1999: s. v. *quizá(s)*) は「たぶん、おそらく」の訳語を与えている。多くの学習者はここだけ見て「たぶん」を使っているものと思われる。しかし、この辞典では用例を直説法のものや接続法のものに分け、後者は「疑念が強い」と注記しており、日本語訳でその違いを出そうとしているようだ。なお、これ以降挙げる全ての例文において、原文にあるイタリック・太字・下線などは無視し、“~”による省略は適宜補った。そして、直説法の動詞はイタリックで、接続法の動詞は太字で示すこととする。

- (1) *Quizá(s) hará buen tiempo mañana.* 明日はたぶん晴れるだろう。
- (2) *Quizá(s) no lo **creas**, pero es cierto.* 君は信じないかもしれないが、それは本当だ。

一方、高垣 (2007: s. v. *quizá(s)*) は「おそらく、もしかしたら」という訳語を与えている。用例には、接続法のもを挙げている。

- (3) *Quizá **sea** posible ese cambio.* おそらくその変更は可能だろう。

その上で、「動詞は接続法を取ることが多いが、話し手の確信の度合いが強いと直説法を用いることがある」と述べ、宮城 & 山田 (1999) と異なって、叙法の選択に頻度の差があるとしている<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> スペインとラテンアメリカの書き言葉を調べた Woehr (1972: 322) によれば、スペインでは直説法 34 例/接続法 65 例、ラテンアメリカでは直説法 32 例/接続法 45 例で、多少の地域差があるにせよ、接続法 110 例は全体の 62.5 パーセントになる。しかし、スペイン・ラテンアメリカの話し言葉を対象にした DeMello (1995: 350) によれば、直説法 197 例 (64 パーセント) に対して接続法は 113 例 (36 パーセント) だった。また、メキシコの話し言葉を対象にした Bayerová (1994: 65) によれば直説法 10 例に対して接続法 9 例。スペイン王立アカデミーのコーパス CREA から口頭と雑誌のデータを対象にした寺崎 (2011: 213) によれば、直説法 (寺崎の「直説法」と「推測法」を合算した数値) が 52.3 パーセント、接続法が

(4) Quizá es la única solución. 多分唯一の解決法だろう。

用例にあてた訳語は、接続法が「おそらく・・・だろう」、直説法が「多分・・・だろう」で、訳し分けが確認できる。

## 2.2. 訳し分ける学習文法

伝統的に、日本でのスペイン語教育で quizá(s) が導入されるのは接続法の用法のひとつとして「疑惑文」が取り上げられるときだ。例えば福畠 (1995a: 336) は、「単文での接続法」を説明する中で「疑惑文は、「たぶん、おそらく」を意味する quizá, tal vez, probablemente などの副詞に導かれるが、疑いの程度が少ないときや、これらの副詞が後に来るときは、直説法を用いる」と述べて、次のような例を挙げている。

(5) Quizá lo sepas. ひょっとしたら君はそれを知っているかも知れない。

(6) Quizá lo sabes. たぶん君はそれを知っているだろう。

福畠は、まず quizá の意味を「たぶん、おそらく」としているのだが、例文の訳には、動詞が接続法の例 (5) では「ひょっとしたら・・・かも知れない」を使い、直説法の例 (6) には「たぶん・・・だろう」を用いている。一方、同じ著者が別の箇所では quizá と接続法の組み合わせを「おそらく・・・だろう」と訳している。

(7) Quizá tengas razón. おそらく君の言うことは正しいだろう。(福畠 1995b: 418)

また、上田 (2011: 224) は「主節の接続法」の中で「«Acaso / Tal vez / Quizá(s)+ 接続法» で「疑惑」(「たぶん、おそらく」) の意味を示すとし、「直説法を使うと事実として認識されるので、より実現性が高くな」と述べて、以下の例文を挙げている。

(8) Quizá llueva esta tarde. たぶん今日の午後は雨になるでしょう。

(9) Date prisa. Tal vez vamos a perder el tren. 急いで。列車に乗り遅れるかもしれないよ。

上田は quizá と接続法の例 (8) を「たぶん・・・でしょう」で訳している。直説法の例 (9) は quizá ではなくて tal vez との共起だが、叙法によって訳し分けていると考えて良いだろう。私には、上田が直説法にあてた「・・・かもしれない」の方が「実現性」はむしろ低いように感じられるが、日本語母語話者の間に存在する感じ方の違いの例として興味深い。

## 2.3. 訳し分けない学習文法

手元の学習者向け文法書を見ると、quizá(s) と共起する叙法の違いを訳し分けない (あるいは訳し分けが確認できない) ものの方が多い。高橋 (1967: 311) は quizás に対して接続法の例文のみを挙げている。例 (7) と実質的に同じ文だが、「たぶん・・・だろう」で訳している。

---

47.7 パーセントだった。CREA の 2004 年以降のデータを見た土井 (2009) の調査でも、スペインでは接続法が 55 パーセントだが、ラテンアメリカでは 37 パーセントにしかならない。従って、実際には「接続法を取ることが多い」とは言えない。

(10) Quizás **tengas** razón. たぶん君のいうとおりだろう。

小林 & Gallego (2009: 203) は「予測」を表す次の副詞 (句) が文頭にあれば、一般に接続法が続きます。しかし、しばしば直説法も見られます」と述べている。

(11) Quizá(-s) los dos se **conozcan** ya. 多分 2 人はもうお互い知ってるよ。

(12) A estas horas, quizá(-s), **hay** mucho tráfico en el camino.

例 (12) は quizá(s) が「文頭でなければ、直説法が用いられ」る例として挙げられている<sup>3</sup>。日本語訳はつけられていない<sup>4</sup>。

西川 (2010: 221) は「独立疑惑文は、「たぶん、おそらく」を意味する *quizá, tal vez, acaso, probablemente* などの副詞に導かれる」とし、「現在および未来に関する疑惑は、接続法現在を用い」、「疑いの程度が低い場合には直説法が使われる」と説明している。例文の訳には「たぶん」を使っている。

(13) Quizá Marta no **llegue** a tiempo. たぶんマルタは時間通りには来ないよ。

(14) Quizá **conoces** a esa bibliotecaria. たぶん君はその司書を知っているよ。

寺崎 (1998: 220) は「疑惑文は、ある事象に対する話し手の推測を表す」として、「可能性を意味する副詞が文頭に置かれ、[*quizá / tal vez / acaso / posiblemente* + 接続法] の構造をとる」と述べ、「現在または未来の事象を推測する場合、動詞は接続法現在が普通であるが、接続法過去または条件法未来や直説法現在が用いられることもある。ただし、直説法現在を用いるのは規範的に見て正しくないとされる」と説明している。また、直説法の場合は「可能性の高い意味合いを帯びる」と言う。例 (16) は「発話時点よりも前の事象を推測する (p. 221)」場合で、直説法現在完了形の使用は「口語」とであると説明している。

(15) Quizá él **venga** esta mañana y tal vez no disponga de mucho tiempo. たぶん今日の午前中に彼は来るでしょうけど、おそらくあまり時間はないでしょう。

(16) Quizá **has recibido** noticias de Venecia... たぶん君はヴェネツィアからの知らせを受け取ったのだろう・・・

三好 (2016b: 65) は「いくつかの疑いの副詞で推測の意味が表現できます。単なる想定の内容なら接続法になります。直説法現在や直説法未来も使われます」と述べて、直説法と接続法の動詞を単一の例文に埋め込んでいる。

<sup>3</sup> この説明は誤り。正しくは、問題の副詞が文頭でなくても動詞の前にあるときは叙法の交替があり、後にあるときは直説法になる。例えば «Un pan dividido quizá **alimente**, pero dividido en doce se convierte en migajas (RAE & ASALE 2009: §25.14)» 「切り分けたパンは栄養になるかもしれないが、12 に分けたらパン屑になってしまう」のように、*quizá* が文頭になくても後続の動詞が接続法の例がある。

<sup>4</sup> 文意は「この時間には、*quizá(s)*、道は混んでいる」のようになる。

(17)

- a. {Probablemente / Posiblemente / Quizá / Tal vez} {llueva / llueve / lloverá} mañana.
- b. Acaso llueva mañana. おそらく明日は雨だろう。

(18) Quizá venga Carmen mañana. カルメンはたぶん、あした来るでしょう。

Quizá を含む文には訳がないが、*acaso* の文の後についたものが両文の訳となっていると考えて良いだろう。なお、別の箇所 (p. 61) にある例 (18) は接続法だけの例で、「たぶん・・・でしょう」を使って訳されている。

三好は叙法の違いによる意味の違いがあるかどうか明確に述べていないが、意味の違いを説明した上で単一の文に直説法・接続法の動詞を埋め込んでいるものもある。高垣 (2018: 125) は「「疑いの副詞」には *quizá*, *quizás*, *tal vez*, *acaso*, *a lo mejor* などがあります。どれも「たぶん、ひょっとしたら、おそらく」を意味する副詞 (句) です。内容が事実だと思ふ度合いにより直説法 (より確実) と接続法 (より不正確) を使い分けます」として、以下の例文を挙げている。

(19)

- a. Quizá venga (*viene*) más tarde. ひょっとしたら彼 (彼女) はもう少しあとで来るかもしれない。
- b. quizá たぶん、きっと
- c. venga は *viene* より不確かな気持ちを表します。

(20) Quizá Pedro venga (*viene*) mañana. たぶんペドロは明日来るでしょう。

例文の語釈では *quizá* に「たぶん」だけでなく「きっと」を入れているのが注意を引く。「ひょっとしたら」と「きっと」の間にはかなりの差があるので、学習者が困るかもしれないが、著者はむしろ意識的に単一の訳語で学習者に誤解を与える (例えば「たぶん」だと思ひ込む) ことを避けようとしているのかもしれない。なお、高垣は別の箇所 (p. 123) でほぼ同じ例 (20) に「たぶん・・・でしょう」をあてている。

また、訳語に「たぶん」などの副詞的要素を使わず、文末の表現だけで処理している文法書もある。廣康 (2016: 338) は、「次のような疑念を表す副詞は、いずれも「多分」「おそらく」といった意味で、疑いの程度によって、直説法と接続法を使い分けます」として、以下の例を挙げる。

(21) El niño está muy caliente; quizá tiene / tenga fiebre. この子は熱いね。熱があるのかもしれない。

一方、(西村 2014: 105) は「接続法を用いたほうが断定がより弱いことが示されます。また、(...) 推量を表す未来形と結び付くこともよくあります」と述べて3つの動詞形を埋め込んでいる。

(22) Quizá no {haya / hay / habrá} más remedio. 他に方法がないのかもしれない。

東京外国語大学スペイン語専攻用の教科書も、同じ方式を採用している。

(23) Quizá {viene / venga} más tarde. (彼は) あとで来るかもしれない。

私自身の学習者としての経験から言えば、*quizá(s)* が直説法と共起するときと接続法と共起するときで、日本語で訳し分けられるような違いがあるかどうか分からない。違いがあったとして、それぞれに

適切な日本語訳は思いつかない。そこで、「Quizá(s), tal vez, probablemente, posiblemente などの副詞 (句) は事実かどうか不確実と見なす事柄と共に用いられる。直説法または接続法が用いられる (意味の違いはとりあえず気にしなくて良い) (東外大スペイン語 2019: 76)」という記述を採用している<sup>5</sup>。訳語の「かもしれない」は、私の学習経験から「たぶん」ほど強くない表現として選んだものだ。

## 2.4. 辞書・文法書のまとめ

ここまで日本の学習辞典や文法書による quizá(s) の扱いを見た。各著者が叙法の交替による意味の差異も視野に入れて例文の訳を工夫していることが見てとれるが、訳語の選択には個人差があり、「たぶん」を直説法の例にあてる人と接続法の例にあてる人がいる。また、quizá(s) を含む副詞の説明に「たぶん」を使っている例が目立つ。これは、宮城 & 山田 (1999) が与える最初の訳語が「たぶん」であることと関連があるかもしれない。

すでに述べたように、本稿は詳細な quizá(s) の記述や日本語との対照研究には立ち入らないが、上に挙げた著者たちの説明を、スペイン語圏の規範文法の記述を交えて整理しておきたい。

スペイン語の quizá(s) は伝統的に「疑いの副詞」に属するが、これは *adverbios de duda* の訳にあたる。現在のアカデミア文法では «*adverbios de duda y de posibilidad* (RAE & ASALE 2009: §25.14i)» と呼んでいて、「疑い」に「可能性」が並置されている<sup>6</sup>。寺崎 (1998) は可能性を意味する副詞、小林 & Gallego は予測を表す副詞としている。

そして、「疑惑文」は *oración dubitativa* の訳だと考えられる。これは、平叙文、疑問文、感嘆文、命令文、願望文と並ぶ伝統的な文の類別のひとつだが、あり得る文のモダリティを網羅しておらず、例えば「疑惑」はあっても「可能性」が拾われていないという (RAE & ASALE 2009: §1.13h)。疑惑文の性格づけとしては、上田や西川が「疑惑」を表すとしているのに対して、寺崎 (1998) と三好 (2016b) は「推測」の意味が表現されると言う。叙法の使い分けについては、疑いの程度、事実だと見なす程度、という言い方での説明が多いが、三好は「単なる想定」であれば接続法、西村は「断定がより弱い」のが接続法としている。

伝統的な「疑い (*duda*)」という用語から理解される範囲内で説明しているものが多いけれど、別の観点からの説明を試みているものもある。学習者向けにいかに分かりやすく説明するかが、それぞれの著者の腕の見せ所のはずだが、もしかしたら学習者は説明の始めの方に出てくる「たぶん」にしか注意を払わないかもしれない。そうしたら、工夫を凝らした例文の訳が無駄になりかねない。

## 3. アンケート調査

### 3.1. 概要

今回実施したアンケートは、日本語話者を対象とした「たぶん」に関わるものと、スペイン語話者を対象とした quizá(s) に関わるものの2つに分かれる。前者を EncJ、後者を EncS と呼ぶことにする。それぞれのアンケート内容は次ページに示す。

<sup>5</sup> ただし、今回のアンケート調査の結果を踏まえて、より具体的に「意味の違い」に言及することを検討すべきかもしれない。

<sup>6</sup> この表現には、「疑い」の副詞と「可能性」の副詞が別々だと読む余地がある。仮にそうだとすると、具体的なグループ分けが明示的に示されている訳ではないが、アンケート結果のところで述べる *-mente* の副詞とそれ以外の区別が意図されている可能性はある。原文は注 8 参照。

\*\*\*\*\* EncJ \*\*\*\*\*

次のそれぞれの文について、「来る可能性」をパーセントで表してください (文の右に数字で書く)。こういう言い方はしない、という場合は×を書いてください。

- |                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| 1. (彼は) 多分来る。          | 16. (彼は) ひよっとしたら来る。        |
| 2. (彼は) 多分来るだろう。       | 17. (彼は) ひよっとしたら来るだろう。     |
| 3. (彼は) 多分来るかもしれない。    | 18. (彼は) ひよっとしたら来るかもしれない。  |
| 4. (彼は) 多分来るんじゃないかな。   | 19. (彼は) ひよっとしたら来るんじゃないかな。 |
| 5. (彼は) 多分来たりして。       | 20. (彼は) ひよっとしたら来たりして。     |
| 6. (彼は) きっと来る。         | 21. (彼は) もしかしたら来る。         |
| 7. (彼は) きっと来るだろう。      | 22. (彼は) もしかしたら来るだろう。      |
| 8. (彼は) きっと来るかもしれない。   | 23. (彼は) もしかしたら来るかもしれない。   |
| 9. (彼は) きっと来るんじゃないかな。  | 24. (彼は) もしかしたら来るんじゃないかな。  |
| 10. (彼は) きっと来たりして。     | 25. (彼は) もしかしたら来たりして。      |
| 11. (彼は) 恐らく来る。        | 26. (彼は) 来るだろう。            |
| 12. (彼は) 恐らく来るだろう。     | 27. (彼は) 来るかもしれない。         |
| 13. (彼は) 恐らく来るかもしれない。  | 28. (彼は) 来るんじゃないかな。        |
| 14. (彼は) 恐らく来るんじゃないかな。 | 29. (彼は) 来たりして。            |
| 15. (彼は) 恐らく来たりして。     |                            |

\*\*\*\*\* EncS \*\*\*\*\*

¿A qué tanto por ciento de probabilidad te suena de que venga? Pon la cifra al final de cada oración. Si la oración no te suena o si no la usarías, pon una X.

1. Quizá *viene*.<sup>7</sup>
2. Quizá **venga**.
3. Quizás *viene*.
4. Quizás **venga**.
5. Tal vez *viene*.
6. Tal vez **venga**.
7. Acaso *viene*.
8. Acaso **venga**.
9. A lo mejor *viene*.
10. A lo mejor **venga**.
11. Posiblemente *viene*.
12. Posiblemente **venga**.
13. Probablemente *viene*.
14. Probablemente **venga**.
15. Seguramente *viene*.
16. Seguramente **venga**.
17. *Vendrá*.

<sup>7</sup> 文例のイタリックと太字はアンケート原文にはない。本稿の例文における直説法と接続法の扱いに合わせた。

EncJ の文例は「多分、きっと、恐らく、ひょっとしたら、もしかしたら、 $\emptyset$ 」と「 $\emptyset$ 、だろう、かもしれない、じゃないかな、たりして」の組み合わせで作った。これらの形式の選択は、事前の調査等に基づくものではなく、2 段組で用紙 1 枚に収まる範囲の数を、私自身が思いつくままに挙げたものだ。また、問いにある「来る可能性」についても、回答者の何となくの印象を得るといふ以上の意図はなく、特定のモダリティを念頭に置いているわけではない。

EncS のパターンは EncJ と共通で、*quizá, quizás, tal vez, acaso, a lo mejor, posiblemente, probablemente, seguramente* と、動詞 *venir* 「来る」の直説法現在 3 人称単数形 *viene* と接続法現在 3 人称単数形 *venga* の組み合わせで作ってある。また、推量の用法を持ち、「だろう」で訳されることの多い直説法未来形の *vendrá* を加えた。副詞には RAE & ASALE (2009: §25.14i) で叙法の交替があるとされているものを選んだ<sup>8</sup>。なお、EncS では *la probabilidad de que venga* 「来る蓋然性 (確率)」を問うていて、EncJ の「可能性」とは異なるが、話者の何となくの印象を得ることが目的であり、両者の結果を比較する妨げにはならないだろう。

EncJ は 2018 年 12 月に、東京外国語大学スペイン語専攻 1 年次の授業において行った。アンケート用紙を配布し、その場で回答してもらい、回収した (54 人)。同 3 年次生 (4 人)、大学院生 (3 人) に同様のやり方でアンケートを行ったものを加え、合計 61 人分のデータを得た<sup>9</sup>。

EncS は 2018 年 12 月から翌 1 月にかけて、日本でスペイン語を教えているスペイン人 10 人の協力を得て実施した。用紙を渡してその場で回答してもらったものと、メールで回答を得たものがある。

以下、それぞれの結果を報告し、いくつかコメントを加える。

### 3.2. EncJ 結果

EncJ の結果を次ページの表 1 に示す。数値は左から、パーセントを答えた (×ではなかった) 数、平均値、最高値、最低値、最頻値。

まず、副詞があり動詞が言い切りになっている形において平均値が 70 パーセントを超える「きっと (78.4)、恐らく (75.9)、多分 (73.5)」と、30 パーセント台の「もしかしたら (33.3)、ひょっとしたら (30.7)」に大きく分かれる。前者は「来たりして」との相性が悪い点でも共通する。

次に、文末表現については、副詞のない形において平均値が高い方から「だろう (84.4)」、「じゃないかな (66.7)、かもしれない (55.0)」、「たりして (26.3)」の 3 グループに分けることが出来そうだ。「多分」との組み合わせで最初の 2 グループの区別が判然としないが、他との組み合わせでは維持されているように見える。「じゃないかな、かもしれない」のグループ内では、「もしかしたら」との組み合わせ以外では「じゃないかな」が高い数値を示す。

以上のことから、これらの副詞と文末表現は、ある程度独立して「来る可能性」の高低に関与している可能性を考えることができる。ただし、これがどのようなモダリティであるのか、幾つのモダリティが関与しているのか、などは勿論分らない。

<sup>8</sup> RAE & ASALE (2009: §25.14i) は、*quizá, quizás* を使って叙法の交替にかかわる制限を説明した後、*tal vez, acaso, a lo/la mejor* ならびに *posiblemente, probablemente, seguramente* などに同様の制限がある («Esta restricción se extiende a *tal vez, acaso y a {lo ~ la} mejor* (§25.14n), así como a *posiblemente, probablemente, seguramente*, y otros adverbios similares») と述べている。もしかしたら *así como* の前と後で副詞をグループ分けしているのかもしれない。また、このリストは閉じられたものではないということも分かる。なお、*a lo mejor* の異形態 *a la mejor* は扱わなかった

<sup>9</sup> 全問に回答しなかったものは集計対象から除いた。



表 1

		数値	平均値	最大値	最小値	最頻値
1	(彼は)多分来る。	60	73.5	100	20	80
2	(彼は)多分来るだろう。	58	67.6	90	20	70
3	(彼は)多分来るかもしれない。	39	45.3	80	5	50
4	(彼は)多分来るんじゃないかな。	60	59.4	90	10	60
5	(彼は)多分来たりして。	26	24.2	50	1	10
6	(彼は)きっと来る。	61	78.4	99	25	90
7	(彼は)きっと来るだろう。	58	74.6	99	10	80
8	(彼は)きっと来るかもしれない。	27	56.3	85	15	40
9	(彼は)きっと来るんじゃないかな。	56	64.0	90	20	80
10	(彼は)きっと来たりして。	12	18.0	60	1	20
11	(彼は)恐らく来る。	59	75.9	99	10	90
12	(彼は)恐らく来るだろう。	58	72.5	99	5	80
13	(彼は)恐らく来るかもしれない。	21	55.3	80	2	60
14	(彼は)恐らく来るんじゃないかな。	56	62.9	90	10	70
15	(彼は)恐らく来たりして。	11	26.8	50	10	30
16	(彼は)ひよっとしたら来る。	50	30.7	60	5	30
17	(彼は)ひよっとしたら来るだろう。	35	30.0	60	5	30
18	(彼は)ひよっとしたら来るかもしれない。	56	25.9	50	1	20
19	(彼は)ひよっとしたら来るんじゃないかな。	53	26.3	60	1	20
20	(彼は)ひよっとしたら来たりして。	36	17.1	50	0	10
21	(彼は)もしかしたら来る。	48	33.3	70	5	20
22	(彼は)もしかしたら来るだろう。	36	32.9	65	10	20
23	(彼は)もしかしたら来るかもしれない。	60	28.0	65	2	20
24	(彼は)もしかしたら来るんじゃないかな。	51	27.7	65	2	20
25	(彼は)もしかしたら来たりして。	35	18.1	60	0	10
26	(彼は)来るだろう。	60	84.4	100	25	90
27	(彼は)来るかもしれない。	61	55.0	80	20	50
28	(彼は)来るんじゃないかな。	61	66.7	90	30	70
29	(彼は)来たりして。	58	26.3	70	0	30

### 3.3. EncS 結果

EncS の結果を表 2 に示す。人数が少ないので、全ての回答を載せる。Quizá(s) に高い数値を含む順に並べ、A から J で識別する。

表 2

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	数値	平均値	最大値	最小値	最頻値
1	Quizá <i>viene</i> .	50	55	50	52	50	40	30	25	25	16	10	39.3	55	16	50
2	Quizá <i>venga</i> .	40	50	40	49	40	40	25	20	20	15	10	33.9	50	15	40
3	Quizás <i>viene</i> .	60	55	55	52	x	40	30	25	25	16	9	39.8	60	16	55
4	Quizás <i>venga</i> .	40	50	45	49	40	40	25	20	20	15	10	34.4	50	15	40
	Quizá(s) <i>viene</i> .											19	39.5	60	16	50
	Quizá(s) <i>venga</i> .											20	34.2	50	15	40
5	Tal vez <i>viene</i> .	30	55	40	55	x	30	20	x	25	25	8	35.0	55	20	30
6	Tal vez <i>venga</i> .	50	50	35	50	40	30	15	20	20	20	10	33.0	50	15	50
7	Acaso <i>viene</i> .	30	x	30	x	x	x	x	x	x	12	3	24.0	30	12	30
8	Acaso <i>venga</i> .	40	x	25	40	x	x	x	5	10	x	5	24.0	40	5	40
9	A lo mejor <i>viene</i> .	50	50	60	50	50	30	15	50	30	35	10	42.0	60	15	50
10	A lo mejor <i>venga</i> .	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	0	x	x	x	x
11	Posiblemente <i>viene</i> .	70	75	70	73	70	60	70	65	x	55	9	67.6	75	55	70
12	Posiblemente <i>venga</i> .	60	70	65	70	60	60	65	60	50	50	10	61.0	70	50	60
13	Probablemente <i>viene</i> .	70	65	70	78	70	70	80	85	x	70	9	73.1	85	65	70
14	Probablemente <i>venga</i> .	60	60	65	76	60	70	75	80	70	65	10	68.1	80	60	60
15	Seguramente <i>viene</i> .	80	95	90	80	90	80	90	95	90	98	10	88.8	98	80	90
16	Seguramente <i>venga</i> .	70	90	85	75	80	80	x	90	90	97	9	84.1	97	70	90
17	<i>Vendrá</i> .	100	100	90	85	100	100	100	99	95	80	10	94.9	100	80	100

ここでも、副詞を 2 つのグループに分けることができる。数値の高い *seguramente*, *probablemente*, *posiblemente* は、平均で 60 パーセントを超え、最低でも 50 パーセントで、しかも回答者間の違いがそれほど大きくない。それに対して *a lo mejor*, *quizás*, *quizá*, *tal vez*, *acaso* のグループは、最高は 60 パーセントだが、平均で 50 パーセントに達するものがなく、しかも回答者によるばらつきが大きい。また、数値の高いグループに属するのは *-mente* で終わる副詞で、低いグループは形態的に多様だ。

直説法と接続法の交替に関しては、2 人を除いて直説法の数値が高いという結果になった。1 人 (回答者 F) は叙法による違いを感じないと回答してくれた。もう 1 人 (回答者 A) は、*tal vez* と *acaso* については直説法より接続法の数値が高い。回答者が後日内省した結果、*quizá(s)*, *posiblemente*, *probablemente*, *seguramente* では直説法の方がリアル感が出るのに対して、*tal vez* と *acaso* の場合、接続法の方がより気持ちが入る・実現が望ましいことのように感じられる、という説明をしてくれた。この説明が記述に対して持ち得る意味は慎重に検討する必要があるが、「疑惑文」において接続法が果たす役割が単純ではないことは想定できる。

直説法未来形の *vendrá* は、推量の用法を想定して入れたものだが、10 人中 5 人が 100 パーセントと回答している。これは明らかに単純な未来の用法を念頭においた回答だ。90 パーセントと答えた回答者

C も、推量ではなく未来として答えたと報告してくれた。アンケート作成者の私にとっては些か意外な結果だったが、アンケート本来の目的からは離れて、未来形が確実な未来を表しうることが示されたのは収穫だったと言える。この形を「推測法」のような叙法として直説法から切り離す考え方に對抗して、直説法未来形であるとする論拠の1つになり得るとともに、未来を「だろう」で訳す学習書の習慣を見直す必要を示唆している。

Quizá と quizás については、7人が同じに扱っている。それに対して、回答者 A と C は quizás の数値が高い。2人は、自分は quizás を多く使うのでそんな感じがするのかもしれないと答えてくれた。つまり、より親しみのある形がより高い蓋然性を感じさせるということで、語彙項目が持つモダリティとは異なる要因が働いている可能性を示唆する。

より身近な形が高い数値を示すということが言えるとすれば、*acaso* の数値の低さと X の多さも、これと関連しているのかもしれない。私自身は自然な発話で *acaso* の「疑い」の用法を聞いた記憶がない。また、書き言葉でもほとんど見たことがない。仮にそうであったとして、なぜ身近さと蓋然性の高さが関係するのかわからないが、考えてみる価値はあるだろう。

また、回答者 E が Quizás *viene* に X をつける一方 Quizás *venga* を 40 パーセントとしているが、自分は quizá の方を多く使うと補足している。また、*Tal vez viene* にも X をつけている。この回答者は Quizá *viene*, Posiblemente *viene*, Probablemente *viene* という直説法の例に対して、インフォーマルな文脈で、という補足をしていて、これらの副詞とは接続法が用いられるのが基本だと認識しているようだ。直説法が規範的に正しくない、あるいは口語的とする寺崎 (1998) の記述を思い出させる。

*A lo mejor* は、従来直説法とのみ共起すると言われてきた。しかし RAE & ASALE (2009) では叙法の交替があるグループに含められている。川上 (2018) は、実例があることを報告したが、確かに数は少ない。また実際に自分で *a lo mejor* と接続法を使うと言う話者を確認したこともない。今回は 10 人も接続法は使わないという回答で、予想の範囲内の結果となった。

*Seguramente* と接続法の組み合わせに X をつけた回答者が 1 人 (回答者 G) いるが、*seguramente* が直説法とのみ共起すると述べる文法書がある (中岡 1995: 483, 西村 2014: 105) を考えれば、接続法を使わないと言う話者がいてもおかしくない。

一方、*posiblemente* と *probablemente* の直説法に X をつけた 1 人 (回答者 I) については、これらの副詞は直説法との共起が優勢 (RAE & ASALE 2009: §25.14i) という傾向に合わない。個人的な特徴と考えておく。

### 3.4. Quizá(s) の日本語訳

ここまで見てきた2つのアンケートの結果を踏まえ、学習者向けに quizá(s) の日本語訳を考えてみる。数値を付き合わせるだけの乱暴な比較にならざるを得ないが、学習者を説得するためには役立つだろう。

平均値は Quizá(s) と直説法が 39.5 パーセント、接続法が 34.2 パーセント。最頻値は直説法が 50 パーセント、接続法が 40 パーセントだった。それに対して、辞書・文法書の訳を EncJ の平均値の高い方から並べたものが次ページの表 3 になる。

これを見ると、平均値で quizá(s) の値にだいたい対応しているものはない。「ひょっとしたら・・・かもしれない」は低過ぎ、他は高過ぎる。最頻値では「かもしれない」の 50 パーセントが直説法の値と等しくなっている。この中では「かもしれない」が何とか訳せている範囲に入るだろう。

表 3

	例文			EncJ	
	直説法	接続法	両方	平均値	最頻値
たぶん	14	11, 13		73.5	80
おそらく・・・だろう		3, 7, 17a		72.5	80
たぶん・・・だろう	1, 4, 6, 16	8, 10, 15, 18	20	67.6	70
かもしれない	9	2	21, 22, 23	55.0	50
ひょっとしたら・・・かもしれない		5	19a	25.9	20

なお、高垣 (2007) と福嶋 (1995a, 1995b) は「たぶん・・・だろう」を直説法 (4, 6) に、「おそらく・・・だろう」を接続法 (3, 7) にあてているが、今回のアンケートでは「おそらく・・・だろう」の方が数値が高く、著者の訳し分けの意図と合致していない。私自身は、「おそらく」の方が疑いが強いという捉え方で特に違和感を感じないが、アンケートの回答者のほとんどが大学の1年次生で、語感に世代差があるのかもしれない。

EncJ 全体と照らし合わせると、平均値で *quizá(s)* (39.5, 34.2) は「多分来るかもしれない (45.3)」と「もしかしたら来る (33.3)」の間にある。「もしかしたら」は接続法の値にかなり近いので、候補になる。

最頻値では、「多分来るかもしれない (50)」と既に見た「来るかもしれない (50)」が直説法と一致する。しかし、「多分来るかもしれない」を使うのは 61 人中 39 人で、使わないという人も少なくない。私自身は、話し言葉で言うことはあるが、「多分」で設定した見込みを「かもしれない」で下方修正するような感覚で、全体として統一感のある表現だとは感じていない。辞書や文法書で使える表現ではないだろう。一方、「きっと来るかもしれない (40)」が接続法と一致するが、61 人中 27 人しか使わない形なので、これも候補としては相応しくない。

結局、無難に使えるようなのは「もしかしたら」と「かもしれない」ぐらいだろうか。やはり「たぶん」は避けるべきだ。

では、「たぶん」を訳語として使えるような表現は何だろうか。平均値で見ると「多分来る (73.5)」は *Probablemente viene* (73.1) に、「多分来るだろう (67.6)」は *Posiblemente viene* (67.6) に、「多分来るんじゃないかな (59.4)」は *Posiblemente venga* (61.0) に、「多分来るかもしれない (45.4)」は *A lo mejor viene* (42.0) に、「多分来たりして (24.2)」は *Acaso viene / venga* (24.0) に使えるかもしれない。最頻値で考えると、「多分来るだろう (70)」は *Posiblemente viene / Probablemente viene* (70) に、「多分来るんじゃないかな (60)」は *Posiblemente venga* (60) に、「多分来るかもしれない (50)」は *Quizá(s) viene / Tal vez venga / A lo mejor viene* (50) に一致する。「多分来る (80)」と「多分来たりして (10)」は一致するものがない。61 人中 39 人の「多分来るかもしれない」と 26 人の「多分来たりして」を除くと、だいたい *posiblemente* と *probablemente* に対応するということになる。

#### 4. 「疑いの副詞」と叙法

##### 4.1. 「疑いの副詞」のモダリティ

最後に、EncS の結果から考えられる、スペイン語の「疑いの副詞」研究の方向性について触れたい。このアンケートの持つ限界を踏まえつつ、可能な問題提起を考えてみる。

まず、3.3 で触れた、「疑いの副詞」のグループ化について。アンケート結果から、蓋然性の数値が高めで回答者間のばらつきが少ない *seguramente*, *probablemente*, *posiblemente* と、数値が低めで回答者間のばらつきが大きい *a lo mejor*, *quizá(s)*, *tal vez*, *acaso* の 2 グループが想定できた。実は、似たような分類

は既にある。和佐 (2005: 98) は「ある命題の真実性についての確信度を表す副詞」を「蓋然性判断を表す副詞」と呼び、「話し手は命題の真実性に対して何の確信も持っていない」時に使われるものを「可能性判断を表す副詞」と呼んでいる。さらに後者を2つに分け、次のような分類を提案している (和佐 2005: 104):

- a. 命題の真実性に対する確信度の高さを表す副詞: *seguramente, probablemente, etc.*
- b. 単一命題に対する可能性判断を表す副詞: *quizá, tal vez, acaso, posiblemente, etc.*
- c. 命題間の範列関係を表す副詞: *a lo mejor, igual, lo mismo, etc.*

「可能性判断」の副詞の下位分類である「単一命題」と「命題間の範列関係」の区別に対しては、三好 (2016a: 53) や後述する寺崎 (2011: 217) による批判がある。現象的には、和佐が「単一命題」に入れているものでは直説法と接続法が交替し、「命題間の範列関係」のものは直説法とのみ共起するとされている。分類基準として叙法との関係が先にあり、命題の数は後付けの説明だという疑いが残る。

寺崎 (2011: 216-217) は、叙法との関係をより明確に認め、コーパス調査のデータに基づき、接続法と共起しない *a lo mejor* を別立てとし、残りを主に直説法と共起するが接続法とも共起するもの、叙法の交替があるものに分けている。その上で、それぞれのグループをモダリティの観点から次のように分類する。

1. 単なる可能性を表す副詞: *a lo mejor*
2. 蓋然性の程度を表す副詞
  - 2.1 高い蓋然性を表すもの: *seguramente, probablemente, posiblemente*
  - 2.2 低い蓋然性を表すもの: *tal vez, quizá / quizás, acaso*

だが、*a lo mejor* を「単なる可能性を表す」とする根拠は、直説法現在形との共起がほとんどということぐらいで、十分とは言えない。蓋然性の高さの区別も、やはり叙法との関係で行われていると考えられる。だが、寺崎のデータでは、接続法との共起は *quizá(s)* 48 パーセント、*acaso* 46 パーセント、*tal vez* 42 パーセント、*probablemente* 35 パーセント、*posiblemente* 33 パーセント、*seguramente* 9 パーセントで、*seguramente* を別立てにしない根拠がどこにあるのかよく分からない。

和佐と寺崎の分類は、それぞれ示唆に富む部分はあるにせよ、叙法との関係を重視しすぎている印象を受ける。今回のアンケートからは寺崎の分類に近いグループ分けが得られたが<sup>10</sup>、これは *-mente* で終わる副詞かどうかの違いに起因している可能性がある。つまり、*-mente* の副詞は派生の元になる形容詞の意味が明確で、それを手がかりに蓋然性のイメージが作りやすいのかもしれない<sup>11</sup>。それに対して、*quizá(s), tal vez, acaso, a lo mejor* の意味は不透明で、話者同士がバラバラな蓋然性イメージを持っていても表面化しにくいだろう。アンケートでの数値のばらつきの原因はその辺りにあるのかもしれない。

ただし、比較的意味が透明な *-mente* のグループの蓋然性イメージが高く、不透明なグループの蓋然性イメージが低い、しかもそれがおおよそ 50 パーセント前後を境としていることは、偶然ではないかもしれない。仮に、そもそも何かの事象についてその可能性があると言話するのは、少なくとも半々以上の実現見込みがあるからだという語用論的含意があるとすれば、*-mente* グループの数値は分かりやすい。

<sup>10</sup> 和佐の分類と特に異なるのは *posiblemente* の扱いである。

<sup>11</sup> ただし、形容詞の意味がそのまま副詞に受け継がれている訳ではない。寺崎 (2011: 214) は *seguro* の「確信している、確実な」と *seguramente* の「たぶん、おそらく」を対比している。また、*posible* 「可能な」は論理的には可能性がゼロでなければ使えるので «*posible pero poco probable*» 「可能だがあまり起こりそうにない」という言い方ができる。しかし今回のアンケートでは *posiblemente* は最低でも 50 パーセントの値を示し、*probablemente* と変わらない回答の話者もいた。

だとすると、もう一方のグループの数値が低いのは、蓋然性とは別のモダリティが働いているからなのかもしれない。アンケートは話者の蓋然性イメージを問うたものだが、どんなモダリティが関係しているかを示すものではない。実際、より親しみのある形の数値が高い話者がいることは分かっている。伝統的な「疑い」について評価しなおすべきなのかも知れないし、あるいは和佐が蓋然性に対置して「可能性」を提示しているのがヒントになるかもしれない。しかし、それとは別の方向を考えることもできるだろう。

#### 4.2. 接続法との関係

「疑いの副詞」が伝統的に「疑惑文」とともに語られ、接続法との関係が問題にされてきたのは理解のできる現象である。しかし、疑惑文が接続法中心に語られることが行き過ぎると、次のような説明になる。

seguramente 「確かに、たぶん」  
→ a lo mejor, igual 「たぶん」  
→ quizá(s), tal vez 「おそらく」  
→ acaso, probablemente, posiblemente 「あるいは」  
のような推測の程度の強まりを考えることができる (中岡 1995: 483)。

確かに「推測の強まり」は可能性や蓋然性のスケールとは異なるので、今回のアンケート結果に現れた順序や、和佐や寺崎が提案した分類と一致する必要はないのだが、この「推測度」がどのように測られたのかは不明だ。ただし、最初の2行 (seguramente; a lo mejor, igual) を「直説法とのみ組む」と説明していることから、叙法との関連が強く疑われる。また、つけられた日本語訳が蓋然性のスケールを表しているようにも見え、訳語としても不適切であると考えられるものがある。

また、西村 (2014: 105) は、疑いの副詞には「より疑いの程度が低い、つまり断定はしないものものさうであろうと見込んでいることが示されるものと、反対に、より疑いが強く、断定しないことが示されるもの」があり、「前者には、a lo mejor, igual, seguramente があり、これらは常に直説法の動詞と結び付くと述べている。もちろん、蓋然性と断定は異なる概念なので、理論的には、例えば a lo mejor が常に42パーセント程度の見込みを示し、probablemente と接続法が68パーセントを断定せずに示す、という状況を想定することは可能だが、これはどのようにすれば確認できるのだろうか。また、学習者はこのような情報を上手く活用できるのだろうか。

今回のアンケートは、「同じ副詞の場合、直説法または推測法と共起するときは蓋然性がより高く、接続法と共起するときは蓋然性がより低い (寺崎 2011: 217)」という寺崎の推測を概ね支持する結果を示したが、同時に、接続法との共起率が最初の分類基準にならないことを示唆した。つまり、接続法との共起可能性によって副詞をグループ化し、接続法が持つと考えられるモダリティ (例えば断言の有無) によって「疑惑文」を分類・説明する意味がないことが示唆された。A lo mejor と seguramente が実際には接続法と共起するという事実を考えれば、この基準の無効性がより強く疑われる<sup>12</sup>。むしろ「疑惑文」の分類は「疑いの副詞」の分類を中心にすべきで、叙法の関与は副次的だ (単純でない形だが) と考えた方が良いのではないだろうか。

今回示唆された副詞の2グループそれぞれの中では、接続法との共起が極めて少ない a lo mejor と seguramente が高い蓋然性を示した。Seguramente については、低い共起率と高い蓋然性の間に関連があ

<sup>12</sup> Igual が接続法と共起するかどうかは未確認。

るのかもしれない。しかし、a lo mejor に関しては、平均値でグループ内最高であるものの、回答者によっては quizá(s) よりも低い数値を答えていて (B, D, F, G)、他の副詞と大きく異なって孤立している訳ではない。なお、Kovacci (1999: 755-756) は seguramente, probablemente, tal vez, posiblemente, difícilmente, quizá(s), acaso が「疑いのモダリティ (modalidad dubitativa)」を示すとし、「疑いの連続的なスケール」を形成しているという。疑いの最も強いのが difícilmente で、反対に最も確信度の高いのが seguramente だが、間にある他の副詞同士の関係には言及していない。そして、肯定的な極にある seguramente が直説法とともに用いられ、否定的な極にある difícilmente が接続法や直説法未来形、過去未来形とともに使われると述べる。ここでは疑いの程度と接続法との共起可能性が結び付けられているが、上のリストにない a lo mejor が直説法と用いられる理由は説明しておらず、口語的であることが原因であると読めるような記述をしている (p. 758)。

「疑いの副詞」についての研究の現状を踏まえれば、学習文法が疑惑文を接続法で説明するのは止むを得ないのかもしれない。今後期待されるのは、個々の副詞についての精密な研究が、接続法との関係に従属しない形で進むことだろう。私自身は現在 a lo mejor と接続法の共起について調査中だが、これはむしろ a lo mejor が他の「疑いの副詞」と基本的には変わらないことを示すことを目的としている。

## 5. おわりに

降水確率が 90 パーセントと聞くと、ざあざあ降り进行を描いてしまう、と言った人がいる。もちろん、この印象は誤りだ。これを言った人自身も、誤りであることは分かっている。今回のアンケートでは、文例から感じられる蓋然性・可能性をパーセントで表してもらったが、数値で表された結果が直接「蓋然性のモダリティ」を反映しているというような単純化は慎まねばならない。しかし、何が測られたのか特定できない (する意図もなかった) という限界は認めた上で、スペイン語の quizá(s) を「たぶん」と訳すのが適切ではないことは示せたと思う。また、このアンケート結果は、直説法・接続法の両方と共起する「疑いの副詞」が -mente で終わるものとそれ以外のものに分類される可能性を示唆した。少なくとも、それは検証に値するだろう。それはまた、これらの副詞の研究を、叙法に従属させない形で進めることの意義を確認することでもある。

## 参考文献

- Bayerová, Marcela. 1994. «Alternancia indicativo x subjuntivo en oraciones independientes». *Études romanes de Brno* 24, pp. 61-71.
- DeMello, George. 1995. «Alternancia modal indicativo/subjuntivo con expresiones de posibilidad y probabilidad». *Verba* 22, pp. 339-361.
- 土井裕文. 2009. 「Quizá と Quizás」. *Hispanica* 53, pp. 151-155.
- 福嶋教隆. 1995a. 「動詞 -法」. 山田善郎 (監修). 第 18 章, pp. 332-351.
- 福嶋教隆. 1995b. 「文の種類」. 山田善郎 (監修). 第 21 章, pp. 415-423.
- 廣康好美. 2016. 『これならわかるスペイン語文法』. NHK 出版.
- 川上茂信. 2018. 「A lo mejor と接続法 (1)」. 『スペイン語学研究』 33, pp. 51-70.
- 小林一宏 & Gallego Andrada, Elena. 2009. 『スペイン語文法と実践』. 朝日出版社.
- Kovacci, Ofelia. 1999. «El adverbio». Bosque, Ignacio & Demonte, Violeta (dirs.). *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol. 1. Espasa Calpe. Cap. 11, pp. 705-786.
- 宮城昇 & 山田善郎 (監修). 1999. 『現代スペイン語辞典』. 改訂版. 白水社.
- 三好準之助. 2016a. 「副詞句 a lo mejor について」. *Hispanica* 60, pp. 47-67.

- 三好準之助. 2016b. 『日本語と比べるスペイン語文法』. 白水社.
- 中岡省治. 1995. 「推測」. 山田善郎 (監修), pp. 482-486.
- 西川喬. 2010. 『わかるスペイン語文法』. 同学社.
- 西村君代. 2014. 『中級スペイン語 読みとく文法』. 白水社.
- RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Libros.
- 高垣敏博 (監修). 2007. 『西和中辞典』第2版. 小学館.
- 高垣敏博. 2018. 『スペイン語接続法超入門』. NHK 出版.
- 高橋正武. 1967. 『新スペイン広文典』. 白水社.
- 寺崎英樹. 1998. 『スペイン語文法の構造』. 大学書林.
- 寺崎英樹. 2011. 「スペイン語の認識モダリティ副詞と法・時制の相関」. 武内道子 & 佐藤裕美 (編). 『発話と文のモダリティ - 対照研究の視点から』. ひつじ書房, pp. 207-224.
- 東京外国語大学スペイン語研究室. 2019. 『スペイン語1年教科書2019』.
- 上田博人. 2011. 『スペイン語文法ハンドブック』. 研究社.
- 和佐敦子. 2005. 『スペイン語と日本語のモダリティ』. くろしお出版.
- Woehr, Richard. 1972. «“Acaso,” “Quizá(s),” “Tal vez”: Free variants?». *Hispania* 55.2, pp. 320-327.
- 山田善郎 (監修). 1995. 『中級スペイン文法』. 白水社.

執筆者連絡先: kawakami.s@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月7日